

2021 年 4 月 11 日（日）「審きの遅延」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 8:10-14

- 10 そして、悪しき者たちが葬られるのを私は見た。彼らは聖なる場所に出入りしていたが、あのように振る舞っていたことは町で忘れ去られている。これもまた空である。
- 11 悪事に対して判決が速やかに下されないため、人の子らの心は悪をなそうという思いに満ちる。
- 12 百度も悪を重ねながら、生き長らえる罪人がいる。しかし、私は知っている。神を畏れる人々には、神を畏れるからこそ幸せがあると。
- 13 悪しき者には、神を畏れることがないゆえに幸せはない。その人生は影のようで、生き長らえることがない。
- 14 地上に起こる空なることがある。悪しき者にふさわしい報いを正しき者が受け、正しき者にふさわしい報いを悪しき者が受ける。私は、これも空であると言おう。

《新改訳 2017》伝道者の書 8:10-14

- 10 すると私は、悪しき者たちが葬られて去って行くのを見た。彼らは、聖なる方のところから離れ去り、わざを行ったその町で忘れられる。これもまた空しい。
- 11 悪い行いに対する宣告がすぐ下されないので、人の子らの心は、悪を行う思いで満ちている。
- 12 悪を百回行っても、罪人は長生きしている。しかし私は、神を恐れる者が神の御前で恐れ、幸せであることを知っている。
- 13 悪しき者には幸せがない。その生涯を影のように長くすることはできない。彼らが神の御前で恐れないからだ。
- 14 空しいことが地上で行われている。悪しき者の行いに対する報いを受ける正しい人もいれば、正しい人の行いに対する報いを受ける悪しき者もいる。私は言う。「これもまた空しい」と。

【前奏】

「神様がおられるなら、どうして悪いことを放っておくのですか?」。このような問いはそこかしこで聞かれるでしょう。時々教会に送られてくる手紙やメールの中にも、「だからキリスト教は信じられない」と書かれていることがあります。実際簡単に答えられる問いではありませんが、聖書がこの問題をどう見ているかを調べ、取り組んでみることはできるでしょう。今日の箇所、著者コヘレトも同様の問題に悩み、苦しんでいることが分かります。また、苦しみの人ヨブも「悪人は災いの日を免れ、怒りの日に連れ出されている」（ヨブ 21:30）と、この世の不条理を嘆いています。聖書は、この世には公正が歪められた現実があることを確かに知っています。

今日の箇所は次のような構造になっています（テキストの楽式的分析の試み）。

【二部形式】

- A. a. 称賛の横領（10 節）
 - a'. 裁きの遅延 → 悪の増長（11 節）
- B. b. 神への畏れ → まことの幸せ（12・13 節）
 - a". 真逆の裁き（14 節）

A. a. 称賛の横領

そして、悪しき者たちが葬られるのを私は見た。彼らは聖なる場所に入出入りしていたが、あのように振る舞っていたことは町で忘れ去られている。これもまた空である。（8:10）

本節は「コヘレトの言葉」の中で最も解釈が難しい箇所の一つだと言われています。顕著な訳の違いが分かるものと比較してみましょう。

わたしはまた、悪人どもが葬られたり、神殿に入出入りするのを見た。正しいことを行った者が、その町で忘れ去られるのを見た。これもまた空しいことである。（フランシスコ会訳）

この二つの翻訳に現れている違いは、「忘れ去られる人」を誰と捉えるかです。悪人か（聖書協会共同訳）、正しい人か（フランシスコ会訳）。本節全体では、何かしらの不条理が訴えられているのは確かなのですが、読み方によって微妙に意味合いが変わってきます。冒頭から見ていきますと、「悪しき者たちが葬られる」というのは、本来罪が裁かれなくてはならない人々が丁重に葬られることに対する納得のいかない気持ちです。葬りというのは、古代イスラエルにおいて名誉ある扱いだったのです。汚職をしたような人々が、死んでも称賛されていることへの苛立ちの表現でしょう。しかも、彼らは生前「聖なる場所に入出入りしていた」とも言われています。不正に満ちた生活をしながら、安息日には敬虔を装って礼拝の場に入出入りし、多くの献金をしている。その表向きの姿を見て、人々は「あの人はすごい」「あんなに立派に神に仕えている」と褒めそやす。そして、死んでも記念碑が立てられたりする。彼らの偽りを見抜いているコヘレトは、それはおかしいのではないかと首を傾げているのです。

「忘れる」という動詞は原文では「חָבַשׁ／シャーカー」ですが、真ん中の子音字を少し変えて「חָבַשׁ／シャーバー」（称賛する）と解釈する人もいます。私は論理的意味合いとしてこの解釈が妥当と考えています。悪しき者は、正しい人々が本来受けるべき称賛を横取りし、死んでも誉め称えられるに至った。この世では「称賛の横領」ということが平気で行なわれている。何と忌まわしい現実なのだ！と。

A. a'. 裁きの遅延／悪の増長

悪事に対して判決が速やかに下されないため、人の子らの心は悪をなそうという思いに満ちる。(8:11)

コヘレトは更に先へ進みます。悪いことが行なわれているのに、それに対する正当な裁きがなされていない。この「裁きの遅延」は何によって生じているのでしょうか。罪を犯している者の地位ゆえか、金の力か。日本の政界においても、事実がひた隠しにされた文書改竄問題などがあります。その背後には黒幕を守る力が働いており、どうしても真実を掴みきれない現実があるでしょう。このようなことは世界中どこにでも存在するのかもしれませんが。コヘレトが問題視しているのは、そのような悪事が裁かれないでい続けることにより、悪が増長する可能性があるということです。悪いことをしても大丈夫なのだと悟った人々が、新たな悪事を心に抱くようになるかもしれない。コヘレトが求めているのは人間世界における報いか、神による報いか、いずれであるか明確には書かれていませんが、神が人間世界に働きかけて悪事を暴いてくださることを求めているのでしょう。

B. b. 神への畏れ／まことの幸せ

百度も悪を重ねながら、生き長らえる罪人がいる。しかし、私は知っている。神を畏れる人々には、神を畏れるからこそ幸せがあると。(8:12)

ここから、今日の箇所は新たな局面を迎えます。「神への畏れ」を中心に置いて話を展開していくのです。

そもそも「長寿」というものは神からの祝福として与えられるというのが旧約聖書の思想でした(箴言 3:2, 16, 18)。ところが、コヘレトが見る現実是这样ではなく、「**百度も悪を重ねながら、生き長らえる罪人がいる**」ということだったのです。そして、丁重に埋葬される。「なぜですか？おかしいではありませんか。悪を行なう者は祝福を受けないのが当然の報いではないのですか。神よ、どうして彼らを審いてくださらないのですか」。この言葉の背後には、真逆の現実が存在することも隠されているでしょう。正しく生きている人々が貧しく、苦勞が多く、長生きできない。あるいは、無罪の人が裁判で負けて有罪とされてしまう。そういう現実への苛立ちがよく表されています。

しかし、コヘレトはここで天に目を向けます。「**神を畏れる人々には、神を畏れるからこそ幸せがあると**」。たとえ貧しくとも、短命であっても、丁重に埋葬されなかったとしても、神を畏れて生きることこそすべてなのだ。そこに本当の幸せがあるのだ。

悪しき者には、神を畏れることがないゆえに幸せはない。その人生は影のようで、生き長らえることがない。(8:13)

神を畏れない人々にはまことの幸せがないということが加えられています。なぜか。確かに彼らは地上では幸せに見えるかもしれない。しかし、彼らは自分の身に迫っている最終的な神の審きに目が閉ざされているのだ。それはどんなに恐ろしい日であるか。神との正しい関係こそが人に永遠の安息を与えるのであり、神との関係が悪ければどんなに大きな栄誉を地上で得たとしても、既にすべてを失っているに等しいのだ。

「影」という表現が出てきましたが、これは「実体がない」ことを表しているというより、一日の終わりに影が長く伸びることと彼らの人生の終わりの近いことを重ね合わせた表現と言えるでしょう。もう終わりが近づいているというのに、悔い改めることもない。それは危険な状態であるということです。

B. a". 真逆の裁き

地上に起こる空なることがある。悪しき者にふさわしい報いを正しき者が受け、正しき者にふさわしい報いを悪しき者が受ける。私は、これも空であると言おう。(8:14)

ここで言われていることは基本的に 11 節と同じです。裁きが遅れている。悪しき者が裁かれず長生きをし、正しい者が裁かれて処刑されてしまう（あるいは過労死か）。このようなことが現実には起きているではないか。コヘレトの苛立ちは極限に達しています。14 節の中では二度も「空しい」ということが言われている。「この世の営みは空しい！無意味だ！読者諸君、そうでしょう！？」。そのようにコヘレトは訴えているのです。

このコヘレトの叫びは、冒頭で取り上げた「神がいるなら、どうして悪いことを放っておくのですか？」という問いそのものを思い起こさせるでしょう。不条理がまかり通った世の中に、神はなぜ鉄槌を下されないのか。何もしない神ならいても意味がないのではないか。いや、そもそも神など存在しないのではないか。人間は懷疑が深まると、ついにはこのような思考に至るのかもしれない。

以上の問いに対して、聖書はいくつかの聖句をもって答えています。ここではローマ 2:4-5 を取り上げてみましょう。

それとも、神の慈しみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじるのですか。あなたは、かたくなで心を改めようとせず、怒りの日、すなわち、神の正しい裁きの現れる日に下される怒りを、自分のために蓄えています。

ここでは、審きが直ちに下されない理由が書かれています。神はある意図をもって、ご自身の審きの日を遅らせておられる。それは、罪人が悔い改めるためなのだ。神が願うところは、ご自身の被造物である人間が罪によって滅びることではない。むしろ、悔い改めてご自身に立ち返ることなのだ。そのために、神は忍耐をもって待ち、聖徒たちのとりなしの祈りを意味のあるものとしておられるのだ。このことが分かる聖句をもう一つ取り上げてみましょう。

それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。

(ヨナ 4:11)

イスラエルの敵国アッシリアに対する審きの宣告を託されたヨナは、厭々ながらアッシリアの首都ニネベに赴き、悔い改めを求める説教を語りました。その結果、ニネベの人々は悔い改めてしまったのです。彼らが滅びることを願っていたヨナはふてくされ、憐れみ深い神に対して唇を尖らせました。しかし、そのときに彼に語られた神の御言葉は、神が如何に人類を愛しておられるか、ご自身がお造りになった「世」の救いを求めておられるかでありました。

【コード】

神が世を愛しておられることを証しする最たる出来事、それは御子イエスを世に遣わされたことでした。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3:16)

御子のいのちを犠牲とし、その死によって人の罪に向けられていた神の怒りがなだめられた。そのことを信じるすべての人は罪の赦しを得、神の子とされ、最後の審判における永遠の審きを免れる。その恵みにあずかる人が一人でも多く興されるために、神は忍耐をもって待っておられるというのです。そして、宣教者の御言葉の解き明かしと、聖徒の祈りを用いておられます。教会はこの憐れみ深い神の恵みを宣べ伝えているのです。

【祈り】

忍耐深い神よ。私たちもまたあなたの忍耐の下にある人間の一人です。不条理な世の現実、実は自分自身の内にも潜んでいるかもしれません。すべての人に悔い改めと赦しの機会を与えてくださったあなたの御名を誉め讃えます。そして、主イエスの恵みに依り頼み、これを宣べ伝えます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
物事の真相を知り、万事を正しく裁き給う、父なる神の愛、
最後の審判の全権を握り、今は忍耐をもって悔い改めを求め給う、主イエス・キリストの恵み、
自己吟味とへりくだり、また他者をとりなす祈りへと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。